

## 論文要旨

### 「母親になる」体験をととした女性心理臨床家の職業的発達 —妊娠、出産、子育ての体験と臨床活動の交差—

山口慶子

本研究は、妊娠、出産、子育て期にある女性心理臨床家の職業的発達を、グラウンデッドセオリーアプローチを用いて検討した質的研究である。これまで心理療法の効果研究は、治療効果に心理臨床家の個人的要因が関わることを一貫して示してきた。したがって効果的な心理臨床実践を提供するために、心理臨床家は一個人としての人生や発達を理解し、成長していくことが重要である。本研究で焦点を当てた妊娠や出産は若手が遭遇しやすいライフイベントであり、これらの体験は心理臨床家の心理面接における内的体験、臨床スタイル、臨床観に対して影響をもつ。そのため心理臨床家が妊娠、出産、子育てをどのように体験し、個人として、そして心理臨床家としてどのように自己を発展させているのか理解することが重要である。

第1章では、研究の背景およびそこから導かれる研究課題を示した。はじめに、心理臨床家の職業的発達に関する代表的な実証モデルを若手の段階を中心に概観し、心理臨床家の一個人としての生活や個人としての成長感が職業的機能と密接に関わること、また個人および専門家としての自己の統合が発達課題のひとつであることを述べた。次に、心理臨床家の妊娠、出産、子育てに関する文献を概観し、母親になる体験が職業的自己の発達を高めたり困難をもたらしたりすることを示した。さらに、心理臨床家の妊娠や出産は、職業的アイデンティティだけでなく心理面接のプロセスにも影響することから、心理面接における心理臨床家の内的体験およびそのプロセスを検討する必要性を指摘した。

第2章では、本研究の目的、方法論、意義、本論文の構成を述べた。第一の目的は、以降の研究課題の抽出と問題設定のために、母親および心理臨床家としての体験のテーマを明らかにし、2つの役割間の関係と移行の契機を捉えることによって、初期の子育てと臨床活動のあいだのつながりを捉えることであった。そしてこれらの知見から、心理臨床家が母親になる体験を包括的に理解するには、さかのぼって妊娠期について検討する必要性が導き出された。そこで第二に、妊娠期の心理臨床家の (a) キャリアにおける妊娠の捉え方、(b) 心理面接における困難と対処、(c) 心理面接において妊娠を扱う心理プロセスを検討することを目的とした。第三の目的は、出産の身体的・心理的インパクトおよび復職後の心理面接における内的体験を明らかにし、これらの関わりを捉えることによって、心理臨床家がどのように職業的自己を発展させているのかを明らかにすることであった。第四の目的は、心理臨床家の体験が、親になった数年後どのように変化しているか探ることであった。

続いて本研究の方法論を述べ、インタビュー法およびグラウンデッドセオリーアプローチを用いた質

的研究を採用した理論的根拠を示した。さらに本研究の意義は、(a) 心理臨床家の発達に関する研究、(b) 日本における若手女性心理臨床家を取り巻く社会的文脈、(c) 臨床心理士の教育・訓練制度、(d) 心理臨床家の発達に関する研究領域における方法論に関する示唆を提供する点にあることを述べた。

第3章から第6章では、上記の各目的に関連した4つの研究知見を示した。第3章では、第一の目的を検討するために、著者の修士論文において産後5年程度の心理臨床家から得たインタビューデータを再分析した。そして、母親であり心理臨床家であることによって起こる肯定的体験および否定的体験を見だし、自らの限界を受け容れることが否定的体験から肯定的体験に移行する契機に関わることを示した。

第4章では、第二の目的を検討するために、妊娠期および出産後の心理臨床家へ半構造化面接を実施した。質的分析の結果、キャリアのなかで妊娠は“第一線から降りる”ことと捉えていることがわかった。また、妊娠期の心理面接における困難体験は“‘今ここ’に十分関与できないことに集約された。そして妊娠を扱う心理面接で、セラピストは妊娠を扱う準備段階を経て、一時回避と接近の心理プロセスをたどることを示した。

第5章では、第三の目的を検討するために、第4章の調査協力者に新たな協力者を加え、出産後の心理臨床家へ半構造化面接を実施した。質的分析の結果、心理臨床家は出産および子どもとの身体的・情緒的関わりのなかで自己を省みることにより、復職後の心理面接においてクライアントに対する理解を深め、自己一致した臨床スタイルを発展させていることがわかった。また、母親になることに伴う現実の制約の受け止め方は、心理臨床家としての自己の成長感のあり方に関わっていることを示した。

第6章では、第四の目的を検討するために追跡調査を実施した。そして第5章の調査時点と比べ、ひとりの人間としてクライアントに現前する姿勢がさらに促進されていることを示した。また、発達プロセスを詳細に検討するため、臨床経験年数が同じくらいであり、妊娠期および産後の状況が類似しているにもかかわらず、出産後に仕事に戻った後の内的体験が大きく異なる2事例を比較し、共通と相違を同定した。

第7章では、本研究全体の知見を総合的に考察した。はじめに、妊娠、出産、初期の子育て期における職業発達の特徴を、(a) 個人内で起こっている「個人的自己」と「職業的自己」の相互作用、(b) 心理面接におけるクライアントとの関わりのスタイルから考察した。心理臨床家が母親になる体験は、母親の専念から自己再構築へのプロセスと特徴づけられた。続いて先行研究との関連から、(a) 妊娠、出産、子育て期にあることに関わる職業発達上の特徴、(b) 妊娠、子育て期の臨床実践における環境調整および境界調整、そして大学院における訓練および初心者のキャリア教育の重要性、(c) 方法論に関する示唆を論じた。最後に本研究の限界および本研究によって見いだされた課題を挙げ、今後の展望を述べた。